

# 岐阜県におけるカラスの罌(2)

梶浦敬一\*・中島 恬

## Roosts of Crows in Gifu Prefecture (2)

Keiichi KAJIURA・Ten NAKASHIMA

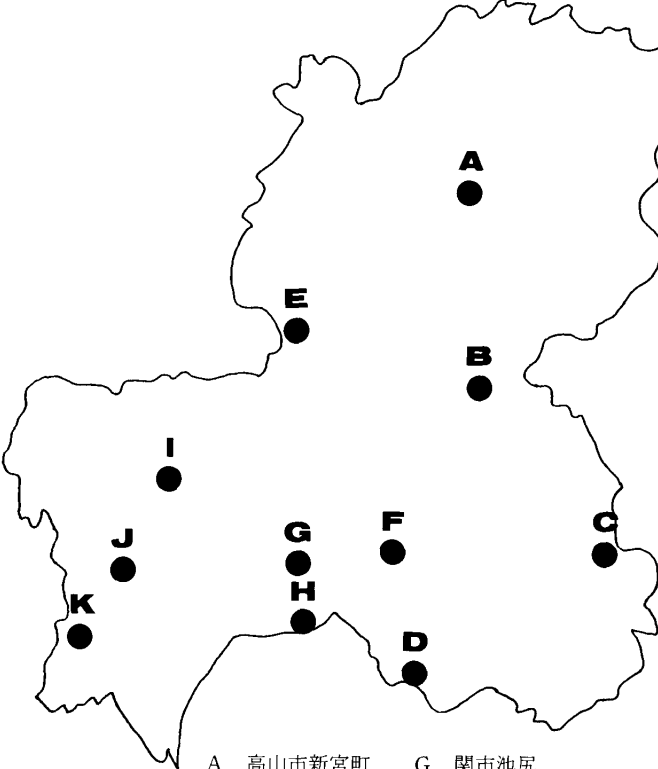
### 1. はじめに

前報(梶浦・中島, 1990)で中濃・東濃地方(郡上郡, 中津川市, 恵南地域を除く)におけるハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* とハシボソガラス *Corvus corone* (以下カラス)の冬季罌について報告した。その後, 地域を広げ岐阜県内の罌を対象に調査を継続してきた。その結果を第2報として報告する。

本文を草するにあたり, 文献の入手に便宜をはかっていただいた日本野鳥の会岐阜県支部事務局大塚之稔氏, 野外観察に多大な協力をいただいた下呂町役場小池雅之・長谷川秀子氏, 村上根尾中学校加藤悟教諭, 県立加茂高等学校生物部員をはじめ多くの方々々に心よりお礼申しあげる。

### 2. 調査地域と調査方法

県内におけるカラスの罌分布, 帰罌数および帰罌行動の解明を目的として, 1989年10月から1992年1月にかけて冬季を中心に調査を行った。調査地域は調査人員と時間的余裕を考慮し, 1989年度は東濃地方, 中濃地方, 1990年度は岐阜地方, 西濃地方, 1991年度は飛騨地方に主力を注いだが, 当地域に限らず可能な限り他地域の補足調査も行った。罌の位置は, 午後3時ごろからカラスが飛ぶ方向を地図上に記入し追跡することで特定した。また聞き込み等も参考にした。罌付近の帰罌行動については, 罌の環境, 帰罌数, 飛来の方



- A 高山市新宮町
- B 益田郡下呂町
- C 中津川市落合
- D 土岐郡笠原町
- E 郡上郡白鳥町
- F 加茂郡川辺町
- G 関市池尻
- H 各務原市伊木山
- I 本巣郡根尾村
- J 揖斐郡揖斐川町
- K 不破郡関ヶ原町

図1 今回確認されたカラスの冬季罌(1992年)

\*岐阜県立加茂高等学校

表 1 各罫の場所、帰罫直前集会所、罫帰数とその環境

記号	罫の場所	罫の林相	帰罫直前集会所	罫帰数〔羽〕 (調査最高値)
A	高山市新宮町	アカマツ・モミ カラマツ・コナラ	南西の山林・畑	796
B	益田郡下呂町湯之島	アカマツ・雑木	西の山林	1106
C	中津川市落合大久手	タケ・スギ・雑木	落合川の川原・河川敷の木 送電線	1913
D	土岐郡笠原町梅平	アカマツ・雑木	北の山林・工場の屋根	2325
E	郡上郡白鳥町向小駄良	スギ・雑木	南の山林	317
F	加茂郡川辺町下吉田	タケ	北の山林・送電線	4800
G	関市池尻	アカマツ	高圧鉄塔・鉄塔近くの山林	3876
H	各務原市伊木山	アカマツ・雑木	北の田および林・西の林 木曾川河川敷の林	1427
I	本巣郡根尾村樽見	アカマツ・コナラ 雑木	西の山林・河原	497
J	揖斐郡揖斐川町市場	アカマツ・スギ	南の山林・東の田	2374
K	不破郡関ヶ原町平井	アカマツ・アラカシ 雑木	東および南東の山林	3459

向を記録した。個体数のカウントは主に2羽を単位として度数計を使用し数えた。また罫はハンプトガラスとハンボンガラスが混生しており、場所により両者の比率が異なるように思われた。しかし、多数の個体を瞬時に判別することは難しく、両者を区別することはできなかった。したがって、今回の結果は両者を一括して扱ったものである。

### 3. 結果と考察

今回の調査では、12か所の冬季罫（以下罫）を確認した。ただし、1990年に蛭川村で確認された罫は、翌年恵那市に移動し、1992年の冬には存在しなかった。このように罫によっては、位置が変わったり罫そのものが無くなってしまふという変動著しいものもあった。1992年1月現在その位置が確認できた罫を図1に示す。

#### 〈飛驒地方の罫〉

当地方の罫を高山市新宮町と下呂町湯之島で確認した。

高山の罫では、1991年11月に清見村三日町の山林に集合するカラスを認めた。しかし、個体数調査を行った1992年1月には、罫は北東1.5km程の高山市新宮町に移っていた。罫の林相はアカマツとモミが優占し、カラマツ、コナラが交じる混交林であった。ここへ帰罫するカラスの90%が高山市街地方面からのものであり、717羽を数えた。

下呂の罫は、飛驒川辺りに開けた下呂温泉街に連なる標高600mの山中に観察された。この罫の位置は、国道41号の下呂トンネルの真上にあり、ネオンの光や街の騒音が容易に届くところであった。

飛驒地方の広大な面積と美濃地方の罫の分布の様子から他に1～2か所の罫が予想されたが、今回の調査では2つの罫を探し得たに過ぎない。また帰罫個体数も合わせて1900羽程と僅かである。樋口（1972）は、三重県における各罫間距離を最大47km、最小20km、また集合範囲は400～500km<sup>2</sup>と報じている。今回集合範囲の確かな調査は行っていないが、各罫間の距離は高山罫・白鳥罫間が、中津川罫・笠原罫間とほぼ同じで約42km、高山罫・下呂罫間は約36kmであった。山地が多く耕地が少なく、また積雪量が多いことから餌量が少なくと予想され、そのことがこの地方の低密度の罫分布と帰罫個体数の少なさと関係していると考えられる。飛驒地方のカラスの冬季における生息環境が、いかに厳しいかを物語っているようである。

## 〈東濃地方の罫〉

中津川市落合、笠原町梅平、蛭川村和田の3つの罫を確かめることができた。このうち1990年に蛭川村にあった罫は、1991年には恵那市正家に移動した。この罫は、恵那市の中心部に近く住宅に囲まれた斜面に植えられたスギ林内にあり、明智町、山岡町など恵南地域のカラスも集まっていた。しかし、1992年にはこの地域に罫は存在しなかった。羽田(1966)によれば、工事による破壊、樹木の伐採や積雪など環境の変化によって罫が移動したり他の罫に統合されるという。しかしながら蛭川や恵那の場合は、罫の環境は変わっていないためその原因は分かっていない。罫の消失によりこの地域のカラスは、中津川の罫か笠原の罫に集合すると推測されたが、1月16日の調査では、大部分のカラスが中津川罫に集まった。中には少数であるが笠原罫のある西に向かうカラスも観察された。

中津川の罫は、すでに山岸(1962)によって見つけられていたもので今回、筆者らも位置、規模などを明らかにすることができた。30年前に発見されて以来、途中場所移動や空屋期間があったかは定かではないが、当地が罫として好条件を備え集合場所として使われてきたことは確かなようである。この罫は木曾川と落合川の合流点南側に位置し、タケとスギの茂った林にある。

## 〈岐阜地方・中濃地方の罫〉

この地方の罫は、梶浦(1980)によれば郡上郡八幡町、関市池尻、加茂郡川辺町下吉田の3地点が記録されている。このうち関と川辺の罫は、今回も同じ場所で確認された。八幡の罫は白鳥町に移り、新たに各務原市伊木山の罫を知り得た。

関の罫では、1990年に関市池尻に存在した罫が、翌1991年には北西に約5 km離れた岐阜市山県北野のアカマツ林に移動し、1992年関市池尻に戻るという興味深い観察がされた。換罫には前述したように環境の変化が大きな要因と思われるが、ちょうどこの時期、関の罫付近の山頂で高圧鉄塔の建設工事が行われていた。罫近くの異様な動きは、用心深いカラスにとって耐え難いものであったにちがいない。そして、工事も終わり静かになった山に、再びカラスが帰ってきたものと思われる。前年まで罫であった岐阜のアカマツ林は、日中の生活場所から罫に帰るカラスが、帰路途中に休息したりより大きな群れをつくったりするための集合所(帰罫前集合所)となっていた。1月10日の調査では、岐阜の市街地およびその周辺や高富町方面で採食したカラスが、つがい、家族群、あるいは小群でこの地に集合し、5時3分に最初の270羽の群れが関罫に向け飛び立った。(この群れは直接罫には入らないで罫近くにある帰罫直前集合所を目指したと思われる。)その後、8分、12分、17分、と続き最後に156羽の群れが飛び立ったのは5時20分であった。

## 〈西濃地方の罫〉

この地方では根尾村樽見、揖斐川町市場、関ヶ原町平井の3か所の罫が確認された。

関ヶ原町の罫は、1980年に梶浦が垂井町の南宮山で調査している。3年後には



夕焼けの中を罫へ帰るカラス

1990. 1. 川辺町下吉田

窪田（1983）が関ヶ原町の松尾山に移動したと記している。それ以来この罌は、松尾山に定着しているようである。上石津町の牧田川の河川敷に罌前集会所の1つがあった。3時ごろ周辺のカラスが集結を始め、中には水浴するカラスの姿も見られた。罌したカラスは、南東（大垣市、養老町）方向から飛翔したものがほとんどで、垂井町方向からは少数であった。

以上が今回の調査から判明した罌の様相である。最後に明らかになった事柄を述べてみたい。

罌に利用される林相は、アカマツ林、竹林、アカマツを交じえた雑木林など様々であるが、必ず常緑樹林か、常緑樹を優占種とした林が選ばれている。このような林は冬でも落葉しないため姿を隠したり寒さを防ぐのに有効なのであろう。中でも本県に分布域の広いアカマツが多く利用されていた。

2つめの罌位置選択における傾向は、樋口（1972）が指摘したように川岸に近いことである。ほとんどの罌が木曾三川およびその支流の川沿いに形成されている。このことは罌経路と深く関わっていると考えられる。日没前後に罌を目指すカラスにとって残光を反射している川は格好な道標となり易く、また地形的に最も低く障害物も少ないなど安全で確実な罌が保証されている。

3つめの選択傾向は、罌が人間の生活圏に存在することである。すべての罌が手の届きそうな所に家の灯があり、人里離れた山林や河川林に営まれているものはなかった。そこにはゴミとしての餌が豊富であり、却って人間に近い程カラスにとって安全地帯なのかも知れない。その他樹令、方角、風向、見晴らしの良し悪しなどについては、顕著な傾向は見られなかった。

県下に生息するカラスの個体数は、罌への集合個体数が最大になる冬季においては各罌に集合する個体数の累計に近い数が期待される。そこで罌するカラスの総数を11か所の罌で集計すると22890羽となる。1980年に県内8か所の罌から総数11500羽が推定されたが、今回はそのおよそ2倍であった。カラスが増えたと言われる昨今、調査結果に限れば県内の生息数は、10年間で約10000羽が増えたことになる。ゴミの増加、環境変化、種としての内的要因など様々な原因が唱えられ、主張されるが、その考察については今後さらに調査を進めていくなかで行いたい。

### 参考文献

- 大塚之穂・坂井隆広, 1975. 岐阜市内清水山におけるカラスの罌調査. 濃飛の野鳥, 88: 525-526. 日本野鳥の会岐阜県支部.
- 梶浦敬一, 1980. 岐阜県内のカラス調査. 岐阜県生物教育, 24: 29-35.
- 梶浦敬一・林貴志, 1981. 奥美濃におけるカラスの秋冬就罌について. 奥美濃路の自然: 31-34. 奥濃飛越観光連盟・白山国立公園岐阜県協会.
- 窪田仁一, 1983. 西濃地方の野鳥のめぐり. 濃飛の野鳥, 185: 1550-1551. 日本野鳥の会岐阜県支部.
- 倉田篤・樋口行雄, 1972. 三重県におけるカラス科2種の就罌行動. 山階鳥類研究所報告, 6 (5/6): 89-103.
- 羽田健三・飯田洋一・香川敏明・母袋卓也・山岸哲, 1966. カラスの長野県北信部の就罌地域群について. 日本生態学会誌, 16 (5): 213-216.
- 平林浩, 1959. カラスの集団生活. 信濃教育, 869: 68-74.
- 平林浩, 1962. 山梨県須玉町津金を中心としたカラスのめぐり集合. 鳥, 17 (79/80): 123-143. 日本鳥学会.
- 細野哲夫, 1967. オナガの生活史に関する研究. 山階鳥類研究所報告, 5 (1): 34-47.
- 山岸哲, 1962. 長野県下での秋冬の罌について. 日本生態学会誌, 12 (2): 54-59.